

日本語あれこれ

大森 海太

先日、本屋の店先で釘貫亨という先生の『日本語の発音はどう変わってきたか』が面白そうだったので買ってみた。ところが新書版にもかかわらず専門書みたいな内容で、とても読み通す根気がないので、面白そうなところだけ拾い読みした。その中のいくつかを紹介したい。

奈良時代のころは母音が八つあり、平仮名表記（あいうえお）のほかに（ゐゑを）を使い分けていた。

奈良時代の万葉仮名は、平安時代に入って平仮名となって定着した。『古今和歌集』や『源氏物語』などはすべて平仮名で表記されたものだったが、鎌倉時代の人には分かりにくくなったので、藤原定家らによって漢字まじりの読みやすいテキストに書き改められた。

江戸中期以降の庶民文学あたりから現代の日本語に近いものになり、鷗外、漱石などにより口語体の文章が確立した。

現代の日本語記述は、漢字、平仮名、片仮名、ローマ字の四種の文字を用いるもので、世界に類を見ない。例文として「決算特価、最大15%OFF！ お値打ち品がドッサリ」（スーパーの広告）

また同じ漢字を幾通りにも読み分ける（本場中国では一字一音）。例文「銀行員ぎんこういんの行雄ゆきおは、修行しゆぎやうのため諸国行脚あんぎや おおきなを行った」

それやこれや複雑な日本語の特徴について色々な記述があり興味深いが、以下はこれに関連して私の感想。

日本語は外国語を取り入れることに柔軟で、古くは天あまぶら、カルタや切支丹など、戦前もモボモガ、今日ではパソコン、スマホなど枚挙にいとまがないが、発音も完全に日本語化、簡略化するので、外国人には理解できない（オリセンに至っては我々しか分からない）。

このように日本人は外国の文字や言葉を用いることは平気なくせに、喋ることはどうも苦手である。反対に世界には口クに読み書きも出来ないのに、何ヶ国語も話す人がたくさんいる。どちらが良い、悪いということではない。陸続きに国境線を引いた世界に生きる人々と島国の私たちとの違いは、単に言葉の問題だけでないものもあるようだ。